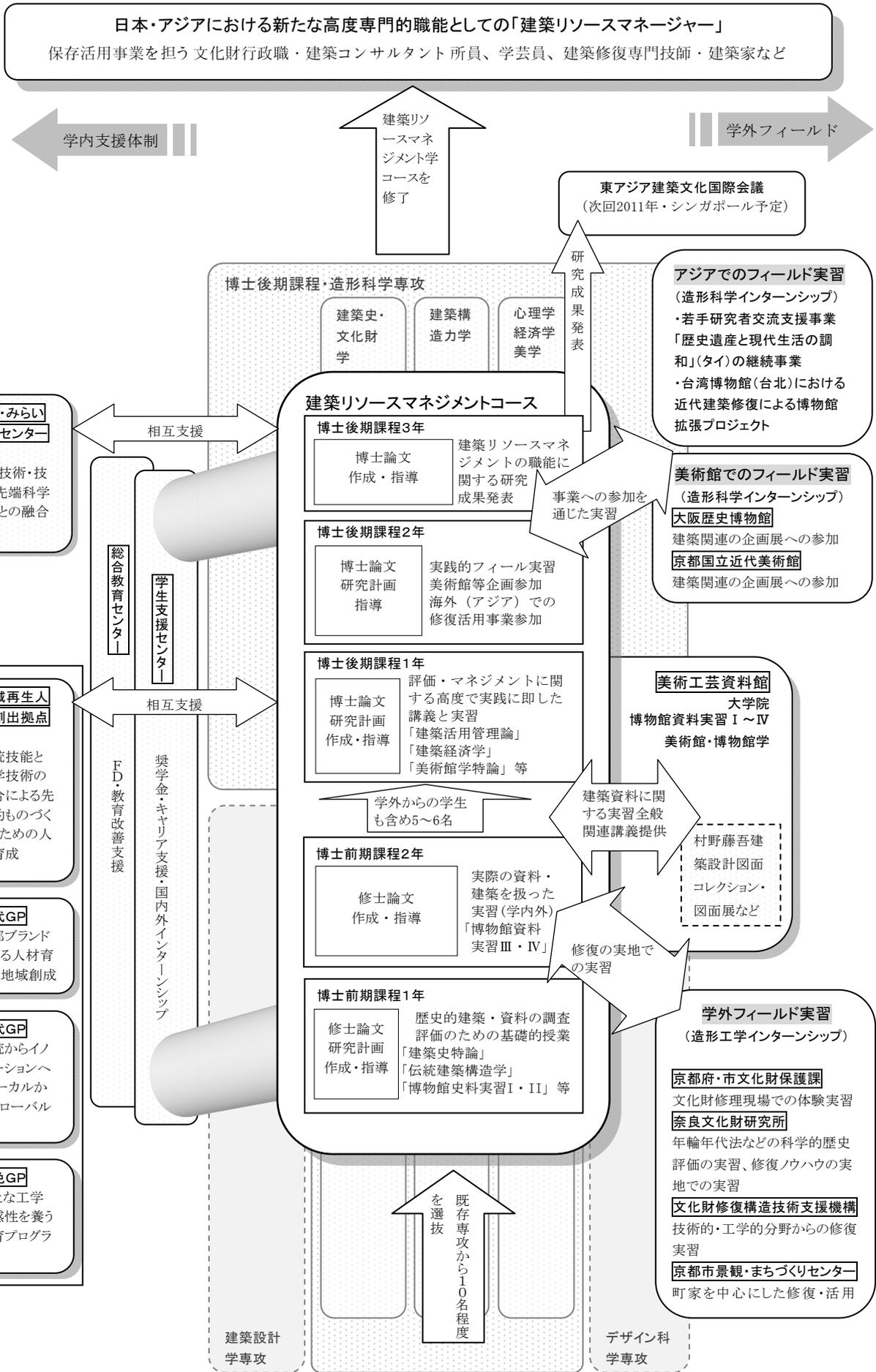


## 教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	京都工芸繊維大学	申請分野(系)	理工農系
教育プログラムの名称	建築リソースマネジメントの人材育成		
主たる研究科・専攻名	工芸科学研究科・造形工学専攻および造形科学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 中川 理		
<p><b>[教育プログラムの概要]</b></p> <p><b>1.プログラムの目的</b></p> <p>東京中央郵便局の保存問題に見られるように、いわゆる古建築を主に想定してきた文化財の枠組みに収まらない歴史的建築をどのように価値付け活用していくかは、持続可能な環境を目指すこれからの社会にとってきわめて重要な課題となりつつある。急速な都市開発が進むアジア途上国においても、この課題は深刻である。そこで、京都工芸繊維大学では、①近現代も含む歴史的建築遺産を正確に価値付けることができる能力、②その価値付けを基に的確な活用のマネジメントを遂行する能力、という二つの能力を併せ持つ人材を育成する教育プログラムを構築する。そこでは、建築文化財の概念を近現代の建築遺産にまで拡張することが必要となるが、近代以降の建築においては設計図面等の資料類も重要な遺産となる。したがって、本プログラムでは、そうした資料類も含めた新たな建築文化財概念として<b>建築リソース</b>を定義し、そのリソースを価値付け<b>マネジメント</b>できる人材を育成することを目標とする。</p> <p><b>2.プログラムの背景</b></p> <p>1996年より始まった文化庁の登録文化財制度は、主に、これまで保存の対象になりにくかった近代の建築遺産の保全を目指したものである。しかし、歴史的建築をマネジメントできる職能が確立されていないため、登録された建物の保全・活用が充分に行えているとは言えない状況である。また、<b>アジア途上国</b>では、都市再開発の中で歴史的建築を活用する手法が求められているため、マネジメント能力も併せ持った建築史の専門家が求められている。建築史研究の伝統を誇る本学では、建築文化財の調査・研究においては傑出した実績を挙げてきたが、一方で<b>卒業生の1級建築士の合格者数が、国公立大学で3年連続1位の実績</b>をあげるなど、設計実務教育においても大きな実績を誇っている。そこで、歴史的建築・資料を正しく価値付け、なおかつそれを利用した新たな社会環境を構築する、つまり<b>評価し同時に活用する</b>という、社会的に強く求められている実践的能力を育成する教育プログラムが計画された。学内には、博物館相当施設として認定され、大学院レベルの実習教育プログラムでも実績のある<b>美術工芸資料館</b>が設置されており、また、京都の伝統工芸やそれに基づくブランド力などをテーマにした現代GPや特色GPも採択されている。この教育プログラムは、こうした全学の取り組みの成果を集結して構築されるものである。</p> <p><b>3.プログラムの実際</b></p> <p>本申請の二つの専攻(博士前期課程造形工学専攻・博士後期課程造形科学専攻)では、工学を基礎としながら人文社会分野など多様な学問領域を総合し幅の広い教育・研究を実践してきた。また、美術工芸資料館は、建築家寄贈図面の分析・展示等で実績を挙げ、博物館資料実習などの教育プログラムを実施している。こうした実績の上に、上記①と②の能力を育成するために、<b>2専攻と美術工芸資料館が共同して、新たに「建築リソースマネジメント学コース」</b>を設置し、以下のような教育プログラムを実施する。</p> <p><b>[博士前期課程]</b>造形工学専攻より10名程度を選抜し、1年次で歴史的建築および資料を扱うための基礎的な知識・方法論を学ばせ、2年次において、建築資料の収集・評価については美術工芸資料館、建築の保存活用については支援体制を整えている京都府・京都市文化財保護課、奈良文化財研究所、文化財修復構造技術支援機構等において、実践的な実習を、造形工学インターンシップとして行う。</p> <p><b>[博士後期課程]</b>前期課程より選抜された学生に、学外から選抜された学生を合わせて5～6名の学生に対して、1年次で、より高度で実践に即した建築リソース評価とそのマネジメント手法について講義と実習を行う。その上で2年次において、造形科学インターンシップとして、建築資料の活用については、相互の支援体制をとってきた大阪歴史博物館(わが国唯一の建築学芸員が在籍)、京都国立近代美術館などにおいて展示企画への参加を通じた実習を実施し、同時に建築の保存・活用については、本年度採択された「若手研究者交流支援事業(歴史遺産と現代生活の調和)」によって関係を築いたタイを中心としたアジア途上国、協力体制を整えつつある台湾(台北)での近代建築活用事業等における実践的フィールド実習を行う。そして、最終年度において、建築リソースマネジメントの新たな職能創出に関わる学位論文を完成させる。</p> <p><b>[教育支援体制]</b>京都工芸繊維大学では、学生支援センターを設置しており、このプログラムの全般にわたり、このセンターによる経済支援、キャリア支援、学習支援を積極的に行う。</p>			

# 京都工芸繊維大学: 建築リソースマネジメントの人材育成

履修プロセスの概念図 (履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。)



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、教育課程がバランス良く構成されており、特に、従来の論文コースに加えて、特定課題型コースを新設する点は、新規性もあり評価できる。また、FD活動、自己点検・評価などの体制整備が進んでいる点も評価できる。

教育プログラムについては、建築リソースマネジメントという社会的なニーズがありながらも教育システムとしては未整備であった領域に取り組み、人材養成を行うことは社会的意義も大きく、京都・大阪・奈良等に軸足を置きながらも、国際的な展開として「アジアでのフィールド実習」等を設定している点は、大学院生の国際性涵養につながるものであり、また、このプログラムの前提となる活動を展開している実績もあり、実現性が高いと期待できる。しかし、建築リソースマネジメントという新しい領域を切り開こうとする教育プログラムとして、人材養成目的に沿って評価基準や修了者のキャリアパスを明らかにすることが望まれる。